

四字熟語を題材とした漢文入門の教材の提案およびその実用性の検証 —ロシア人日本語学習者に対する調査結果の分析を中心に—

グリブ ディーナ

1. はじめに

現在、ロシアを含む非漢字文化圏の国々において、日本学¹が注目を集めており、日本語学習者の人数が増えている。研究者志望の学習者もいるが、日本史の研究には漢文の知識が不可欠であり、思想史・哲学・文学などの研究も同様である。

漢文とは、築島(1980)の定義によると、中国の漢代の文章あるいは漢語つまり漢民族の言語の文章に加え、日本人が漢文体の表記法で作成したものを意味する。日本史研究者にとっては、後者のいわゆる和化漢文の読解力ならびに漢文訓読の作成能力が必要である。但し、和化漢文は時代ごとに特徴があり、作品ごとに語法の特徴があるため、初めて漢文に接する時期では、和化漢文のみを題材とすることは考えにくい。和化漢文を講読するためには、まず漢文の基礎的な知識が必要である。

日本国外での日本語学習者には、漢文基礎の知識を少しでも身につけたい学習者、漢文に興味はあるがそれを専門にするかどうか躊躇する学習者がある。それと同時に、日本語史コースの枠内で、限られた時間で漢文概要の紹介を受ける学習者がいる。そういった学習者のためには、基礎漢文の教育について検討し、教材を作成する必要性が感じられる。従って、本研究では日本史学研究者志望の学習者に限らず、基礎漢文に興味のある学習者、そして必須科目として基礎漢文を教わる学習者全員を対象とした漢文教育について論じる。そういった学習者を対象に、純漢文でありながら完全に日本語としても定着しており、比較的実用性の高い四字熟語に着目し、四字熟語を漢文教育の題材とする可能性について検討する。

本研究の目的は、四字熟語を題材とした漢文入門の教材を作成し、ロシア人日本語学習者を対象とした模擬授業を通じてその教材の実用性を検証することである。

2. 先行研究

2.1. 外国人に対する漢文教育

外国人に対する漢文教育の意義および位置づけについては、後藤(2005)、町(2009)などがあり、史学研究のために必要である他、日本文化への理解度や現代語の理解促進に繋がると指摘されている。

二松学舎大学のもとで「日本漢文教育研究プログラム」および「日本漢文学の世界的研究拠点プログラム」が実施され、2005年および2010年に漢文教育関連のシンポジウムが開催された。中国、韓国、欧州、英語圏、タイ、ベトナムなど国や地域ごと

¹ この「日本学」は、日本関連のことを研究する分野の総称「Japanology」の翻訳語として使用されている。

の現状と問題点が発表された。しかし、実践報告の性格をもった発表は少数である。

外国人向けの日本漢文教科書では、Crawcour (1965)と駒井・ローリック(1988)の二点がある。二点とも説明文が英語で書かれており、現代日本語と日本の古典文法の基礎を修得していることを前提としている。

Crawcour (1965)は、中国の漢籍のみを題材としている。中国語を専門としながら、中国語資料の日本版を使用したい学生を含む、日本研究に興味のある学生を対象としている。歴史的仮名遣いおよび旧漢字体を使用しながら、漢文訓読法について詳細に解説されている。

駒井・ローリック(1988)は、主に日本の古文書を題材としている。原則として常用漢字体を使用しているが、歴史的仮名遣いで統一されている。日本漢文の読本として評価すべきが、漢文の基礎の説明は比較的簡略である。初めて漢文に接する非漢字文化圏の学習者には難度の高い教科書であると考えられる。

なお、ロシアで出版された教科書では、マエフスキー(1991)が漢文に触れている。漢詩等が題材となっており、に漢文の概要について紹介するが、文語体の教科書であるため、漢文に関する情報が少ない。

上記のとおり、外国人日本語学習者を対象とした漢文教科書が存在するが、漢文の導入、訓読法の導入に関しては、研究の余地が大いにあると考えられる。

2.2. 漢文・四字熟語・故事成語などの教育の実践報告および教案

外国人学習者を対象とした日本漢文の教育に関する研究が少数であるため、日本人学生を対象とした基礎漢文教育の教案および実践報告に触れたい。以下では受験対策ではなく、漢文への関心度の上昇を目的とする研究について整理する。

奥村(1994)では、日本人高校生に詩に興味を持たせることをいうことを目的とした漢文教育の指導法が提案されている。国語教育における漢文教育の制度上の問題点、教育者側の問題点、教材の問題点を指摘され、教科書に採録された作品の扱い方への工夫(詩人の感情に焦点をあてること)が提案されている。

磯野(2004)では、日本人中1年生～中2年生における文字を正確、適切に書写する能力の育成を目的とし、「故事成語を書く」・「コルクボードに1字を刻む」という作業が提案され、題材には漢文も使われた。

太田(2006)では、文章作成能力・プレゼンテーション能力の育成、四字熟語を通じて漢文に対する関心度の上昇を目的とした授業の実践報告がなされている。学習者は、大量の四字熟語が提示され、気に入った四字熟語を使って自分の趣味あるいは夢について作文を書いて、それを発表する形式の授業であった。四字熟語が「漢文」として位置づけられながら、現代語の教育の題材として扱われている考え方は、本研究と類似している。

山本(2007)では、日本人高校生に成就感や達成感をより感じられる授業の構築を目標として掲げている。『史記』の補助教材としてマンガを用い、生徒に資料作成および担当箇所の発表を含めたグループ学習を取り入れた授業の実践報告である。生徒の消

極的な態度が自主的な学習へと変わり、平均的な理解度も高まったという結果が見受けられた。

荒木(2009)では、日本人高校生が漢文に関心を深めることを目標とする教案がなされている。地元の長崎を軸として、「古典の名篇」に拘泥せず、一般の常識的な様々な分野の初歩的内容に叙述した漢文を教材として採用されている。「漢文を遠い過去の「遺物」ではなく興味関心を持たせることができる」ものとして扱う立場は本研究と共通している。

2.3. 漢文・四字熟語・故事成語などの教育の実践報告および教案

佐藤(1996)に四字熟語が次のように定義付けられている。

漢字四字で熟語となったもので、四字漢語ともいう。四字熟語とは話し手・書き手の思想・意志を端的に明示することができ、表現効果があるため、日本語の中に用いることがおおい。

本研究における「四字熟語」の定義は、佐藤(1996)の定義に従い、更に『四字熟語辞典』類に掲載されている4字から成る熟語に限定する。

四字熟語の構成の大略として佐藤(1996)では、次の6種が提示されている。

(一) 漢字四字がそれぞれの概念を示して一語となっている「東西南北」「春夏秋冬」、(二) 二字ずつが類似の意味を持って一語となっている「深山幽谷」「酒池肉林」「飽食暖衣」「狂言綺語」、(三) 上二字と下二字とが相反する語として一語となっている「天上天下」「一進一退」「優勝劣敗」、(四) 上二字が下二字を修飾する「娑婆世界」「一切衆生」「世襲財産」、(五) 上二字が主語・目的語、下二字が動作・状態を示す語となっている「一人当千」「小心翼翼」「千篇一律」、(六) 助辞を伴って句となっている「不可思議」「不俱戴天」「不得要領」「傍若無人」

野村(1975)では、新聞の語彙調査に基づき、四字漢語を構成する成分の形態論的特徴や、それぞれの成分の結合関係について記述されている。調査対象は「現代語に出現する、四つの字音形態素からなる結合形態のすべてである」が、古代中国語に起源をもつ故事成語の類もその中に含まれる。四字漢語の構造パターンの分類は、上掲の分類とは観点が異なり、次頁で掲げられているとおりである。

野村分類では、全体の90%以上を占めるI型の四字漢語における、二つの語基間に見られる構文論的結合関係の5類11種(下位分類を含めると24種になる)も提示された。石井(2001)では、このI型の分類が受け継がれ、語構成パターンが5類12種に分けられた。ただし、この分類は本研究の主旨と無関連であるため、ここでは詳しく触れないこととする。

〈I型〉

(○+○) + (○+○) : 上院議員・外国映画・時限爆弾
予備選挙・景気回復・有料道路
公式訪問・産炭地域・密輸基地
主演女優・婚約解消・応援演説

〈非I型〉

- ①類 { (○+○) +○ } +○ : 文房具店・郵便局長・自家用車
{ ○+ (○+○) } +○ : 有資格者・不退去罪・都知事選
- ②類 ○+ { (○+○) +○ } : 新予算案・総建築費・両飛行士
○+ { ○+ (○+○) } : 前副首相・超遠距離・権大僧正
(○・○) + (○+○) : 中長距離・小中学校・正副議長
- ③類 { (○・○) +○ } +○ : 農畜産品・病産院名・各小学校
(○+○) + (○・○) : 巡視船艇
- ④類 (○+○+○+○) : 都道府県・市区町村・甲乙丙丁

3. 四字熟語を題材とした漢文入門教材の作成

3.1. 四字熟語を漢文入門の題材とした理由

本研究で作成する教材案の目標は、学習者に漢文と訓点の概要を紹介するとともに漢文への関心度を上げることである。この目標を達成するため、四字熟語が適切であると考え、外国人に漢文を導入するときの題材を四字熟語にのみ限定すべきとは一切考えないが、四字熟語が題材の一種とされるのに相応しいものであると考える。その根拠を以下で述べる。

- (1) 四字熟語の多くは中国の漢籍に由来しており、いわゆる「純漢文」であるため、漢文教育の題材として適切である。
- (2) 一句が4字と短いため、全ての単語の意味・母語訳を提示し、学習者への負担を軽減することが可能である。ただし、一句が短いため、レ点と一二点のみを導入できる。即ち、四字熟語は漢文の導入にのみ使用可能である。
- (3) 四字熟語が日本語において完全に定着しており、新聞・演説・討論などの場面に広く使われる。日本語学習者にとって、目にする機会があり、比較的身近な素材である。
- (4) 日本語能力試験1級に四字熟語が出題されるため、四字熟語の知識は外国人学習者にとっても実用的であると言える。例えば、日本語能力試験1・2級の対策²の枠内では、一石二鳥・危機一髪・古今東西・再三再四・時期尚早・試行錯誤・弱肉強食・自由自在・中途半端・取捨選択・絶体絶命・二人三脚・

² 倉品さやか(1998)『にほんご単語ドリル〜慣用句・四字熟語〜』ASK出版

八方美人・半信半疑という四字熟語が紹介されている。

なお、四字熟語の学習は、本研究の主要目的ではないが、古田島(1998)では漢文訓読が記憶術であったという指摘を受け、四字熟語を訓読文に書き下すことは四字熟語ならびに漢字の習得にも繋がる効果が期待できる。

3.2. 四字熟語の選定と教材の構成

本研究では、漢文に初めて接する学習者が対象者として想定されたため、教材には典型的な漢文として『論語』を、和化漢文として『吾妻鏡』を一例ずつ掲載した。また、漢文と返り点についての概略を紹介し、その使い方の説明と用例として15点の四字熟語を掲載した。最後に返り点の付加や訓読文の作成が練習できる3点の練習問題を設定した。

真藤(1987)第4章「常用熟語」などを常用四字熟語の目安とし、返って訓読される四字熟語を抽出した。その中からロシア語に類似することわざや名句のあるものを中心に熟語18点を題材とした。

教材の編成にあたり、複数の四字熟語辞典を参考にした。参考辞典は、岩波書店辞典編集部(2002)『岩波四字熟語辞典』岩波書店、講談社(1997)『四字熟語・成句辞典』、三省堂編修所(1998)『新明解 四字熟語辞典』三省堂、田部井文雄編(2004)『大修館書店 四字熟語辞典』である。

題材の抽出にあたり、佐藤(1996)および野村(1975)の分類を参考にした。使用された四字熟語は、佐藤(1996)分類のグループ(一)・(二)・(五)・(六)に属する。野村(1975)分類では、「I型」のほか、「非I型②」と「非I型④」が使用された。

教材に使用した四字熟語の一覧を表1で示す。小テストに使用された熟語を斜体で表記する。

表1 本調査において使用した四字熟語

	返り点の付加パターン	四字熟語
1	○ ○ ○ ○	雲外蒼天
2	○ _レ ○ ○ ○	拱手傍觀・不言実行
3	○ ○ ○ _レ ○	忠言逆耳・柔能制剛
4	○ _レ ○ ○ _レ ○	知足安分・転禍為福・画竜点睛・ 温故知新・発憤忘食・有終完美・ 断章取義・借花献仏・ <i>以心伝心・入郷従郷・坐井觀天</i>
5	○ ○ _レ ○ _レ ○	傍若無人
6	○ ○ _レ ○ ○ _レ	古無虚諺
7	○ _レ ○ ○ _レ ○	不俱戴天
8	○ _レ ○ _レ ○ ○ _レ	狐假虎威・不惜身命

表1では、使用した四字熟語を返り点の付加パターンに沿って分類されている。それぞれの返り点の付加パターンの中では、「動詞+目的語」・「動詞+補語」・「助字」など構文パターンが異なる熟語が含まれ、構文パターンが多様になるように配慮した。

漢文と返り点概要を説明する用例として使用した四字熟語につき、表2から窺えるように、四字熟語の原文と読み、各単語のロシア語訳、四字熟語の意味を日本語で掲載した。また、返り点付きの四字熟語と訓読文も掲載した。ロシア語訳および類似するロシア語の諺・名句については被調査者に推測する形にし、提示しないこととした。

なお、訓読文および振仮名を現代仮名遣いで統一した。参考辞典の表記は現代仮名遣いであることを参考にし、また今回の被調査者の日本語レベルを考慮したうえで、現代仮名遣いで統一することが妥当であったと考える。

表2 教材の一部

訓読文	返り点	語彙・意味	四字熟語
竜 <small>りょう</small> を画 <small>えが</small> きて晴 <small>ひとみ</small> を点 <small>てん</small> ず	画 <small>レ</small> 竜点 <small>レ</small> 晴	画(えがく) рисовать 竜(りょう) дракон 点(てんず) сделать штрих 晴(ひとみ) глаз, суть 竜を描いて最後に瞳を入れることから、物事の眼目となる部分に手を加えて完成させるたとえ。	画竜点睛 <small>(がりりょうてんせい)</small>

表3 小テストの一部

訓読文	返り点	語彙・意味	四字熟語
心 <small>こころ</small> を以 <small>もつ</small> て心 <small>こころ</small> に伝 <small>つた</small> う	以 心 伝 心	以(もつて) при помощи 心(こころ) сердце 伝(つたう) передавать Передавать информацию от сердца к сердцу без использования слов.	以心伝心 <small>(いしんでんしん)</small>

練習及び小テストの部分は、教材本文と同様の構造である。ただし、表3から窺えるように、灰色でハイライトされたセルの項目は未記入であり、学習者に記入が求められている。また、小テストの部分では理解を促すため、四字熟語の辞書的な意味を日本語ではなく、ロシア語で表記されている。

4. ロシア人日本語学習者に対する調査

4.1. 調査概要

前述のとおり、四字熟語を題材とした漢文入門の教材の目標は、学習者に漢文と返り点の概要を紹介するとともに漢文への関心度を高めることである。

そこで、本教材の実用性、すなわち本教材が漢文への関心度を高めるのに効果的であることを検証することを目的とし、2014年3月にロシアの首都モスクワ市の大学二校にて以下のとおり調査を実施した。

調査対象者は日本語を専門とする学部3年生28名であるが、1名のアンケートに無回答の項目が一点あったため、27名を量的分析の対象とする。

調査に協力した現地の教員の意見を考慮したうえ、調査対象者として学部3年生を選定した。グリブ(2013)にも、ロシアの日本語教育現場で日本漢文の教育が実施されている場合、3年生がその対象になりえることが指摘されている。しかし、学部3年生は、古文の知識はもちろんのこと、現代日本語の知識も不十分であると考えられるため、教材の説明を部分的に母語のロシア語にするなどの配慮をした。

調査は、事前アンケート、模擬授業、事後アンケートの3部構成とした。

事前アンケートでは、フェイスシートのほか、漢文および四字熟語に対する学習者の関心度や学習意欲について5件法で答えてもらい、漢文に対する考えを自由記述にて求めた。

模擬授業は55分～65分をかけて実施した。模擬授業の目標は、初めて漢文に接する学習者に漢文・返り点・訓読の概要を紹介し、漢文への関心度を高めることであった。模擬授業の流れは次のとおりである。まずは、『論語』と『吾妻鏡』を題材に漢文という文体、日本漢文の存在、漢文講読の意義などについて簡略に説明した。続けて、返り点の役割(点を中心に、一二点を参考程度で)、訓読について紹介した上で、四字熟語の例を以て学習者とともに検討していった。学習者が授業に積極的に参加できるよう、学習者に四字熟語とその訓読文を音読させた。さらに、パワーポイントのプレゼンテーションで四字熟語の本文と訓読文を提示し、返り点の位置について推測し、四字熟語の意味やロシア語訳について推測する練習も取り入れた。最後に、練習問題を設け、学習者に返り点の付加、訓読文の作成、意味の推測をさせた。

事後アンケートでは、漢文および四字熟語に対する学習者の関心度や学習意欲について、また授業への評価について5件法で答えてもらい、自由記述のコメントと簡単な小テストへの回答を頼んだ。

4.2. 調査の結果および分析

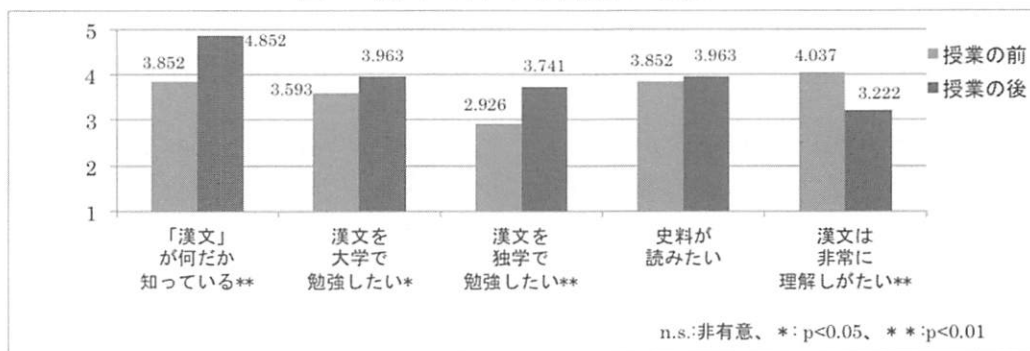
4.2. 1. 漢文に対する学習意欲および意識の変動

四字熟語を題材とする教材が漢文導入において、学習者の関心度上昇に効果的であることを検証するため、事前アンケートと事後アンケートの分析および自由記述の分析を実施した。

まず、学習者の漢文に関する知識の有無や学習意欲の変動を測定するため、5問からなるアンケートに授業前と授業後に5件法で答えてもらった結果を整理する。アンケート項目の内容及び授業前と授業後の平均値を図1で表わす。被調査者に配布されたアンケート文面はロシア語であったが、図1では質問を日本語に翻訳し、掲載する。四字熟語への学習意欲と授業への評価に関する図2および図3も同様である。

なお、t検定を行ったところ、4項目において有意差が認められた。有意差の有無を図1に示す。図1から窺えるように授業後は漢文に対する学習意欲が上がった。「漢文を大学で勉強したい」・「漢文を独学で勉強したい」両項目の平均値が上がり、有意差も認められた。一方、史料への関心度は殆ど変わっておらず、有意差も認められなかった。本研究では、対象者を史学専攻の学生に限定しなかったため、史料に対する関心度が必ずしも高くないことは予測通りの結果となった。ただし、史学研究社を目指さない学習者であっても史料講読に関心を示し、漢文学習に積極的である場合も窺えたことを指摘したい。

図1 漢文に対する学習意欲の変動



次に、自由記述欄の内容を整理した結果を述べる。被調査者の記述の例は、日本語訳を付けて掲載する。

下記で例示するように、授業前の学習者は三グループに分けられる。第一グループは、漢文という語の意味が解らないもしくは良くわからない学習者である。アンケートの設問「漢文が何だか知っている」に対して「知らない」もしくは「あまり知らない」を選んだ学習者は5人おり、S20のような記述コメントもみられた。

【S20】 Не совсем понимаю, что это. Но интересно узнать!

([漢文とは]何だかよく解りませんが、知りたいです。)

第二グループは、漢文について知っているが学習に全く興味がない学習者であり、28名の被調査者のうち、S05、S10をはじめ3名がこのグループに入る。

【S05】 Мне не интересен 漢文, не интересно заниматься древними текстами.

(漢文には興味がなく、古い文章にも興味がありません。)

【S10】 В данный момент это не соответствует моим целям, так как в первую очередь я хочу достичь высокого уровня владения стандартным японским языком.

(今のところは、先ず高レベルの標準的な日本語を習得したいので、それ[漢文の学習]は私の目標から外れている。)

第三グループは、漢文学習に興味があり、専門家として知っておきたい学習者である。S01とS04の例をはじめ、このグループに配属されるコメントが多数を占める。

【S01】 Это интересно, а также необходимо знать для японоведческого кругозора.

(興味深いもので、日本専門家として知るべきです。)

【S04】 Это аспект японского языка, знание которого обязательно, как я считаю при получении высшего образования. К тому же знание 漢文 в японском обществе явл. показателем интеллигентности.

(専門的な高等教育を受けるなら、学ぶべき日本語の一部であると思います。その上、日本の社会では漢文の知識は知性の証である[ということは漢文を学習したい理由である]。)

授業後では、第一グループと第二グループにおいて変動が確認できた。5件法のアンケートでは、漢文に対する理解度及び学習意欲が高まったことが窺えた。自由記述欄からも同じことが窺える。上記と同じ学習者 S20、S05、S10 の事後アンケートの記述を以下で掲載する。S05のように題材が興味深かったというコメントにとどまった学習者はいたが、第二グループであった S10 は授業後に漢文学習に興味を示し始め、漢文学習に対して意欲を見せ始めた例も確認できた。

【S20】 Интересно подан материал, было очень полезно послушать!

(題材の示し方が興味深くて、聞いたことが役に立ちました。)

【S05】 Понравилось подробное объяснение и то, что много наглядных примеров.

(詳しい説明があつて、具体例が多かった点が良かった。)

【S10】 Стала ясна важность наличия элементарных знаний по данной теме, её актуальность в современной Японии. Кроме того знание 漢文 действительно помогает более глубоко понять японский язык, поэтому в дальнейшем мне хотелось бы выделить время для его изучения.

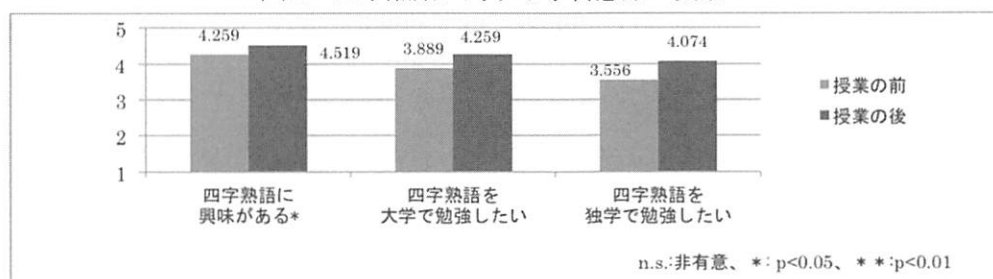
(この分野の基礎知識が必要で、現代日本でも実用的だと思えてきました。また漢文の知識は、現代日本語の理解を深めるようなので、いつかは時間をつくって勉強

したいと思います。)

4.2.2. 四字熟語に対する学習意欲とその変動

漢文教材の題材となった四字熟語に対する学習者の関心度と学習意欲について測定するため、5件法で答えてもらう3問を事前アンケートと事後アンケートに設定した。質問項目の内容、平均値、t検定の結果を図2に示す。授業前でも四字熟語に対する興味を有する学習者が多かった。授業後に四字熟語に対する関心度が少々上がり、有意差も認められた。学習意欲に関しては、特に数人の学習者において上昇はみられたが、有意差は認められなかった。授業前にも高い数値を選んだ学習者が多かったためであると推測できる。

図2 四字熟語に対する学習意識の変動



事後アンケートの自由記述欄に四字熟語に関するコメントが多く、そのうち数例を以下で掲載する。調査に使用された教材には「入郷従郷」など訓読文の形で知られる四字熟語、また使用頻度の低い四字熟語があるという事実は学習者に説明された。しかし、それにもかかわらず、今回の調査範囲では、題材に対して否定的な意見はみられず、学習者が四字熟語に対して肯定的な意見を述べた。

【S07】 Я узнала, что такое 漢文, смогла начать видеть структуру слов из четырех элементов, и с удовольствием продолжила бы изучение этой темы. (漢文が何だか解りました。四字熟語の構成も見え始めました。このテーマの勉強を続けたい気持ちがあります)

【S12】 Было интересно узнать древние пословицы и их смысл и прочтение.

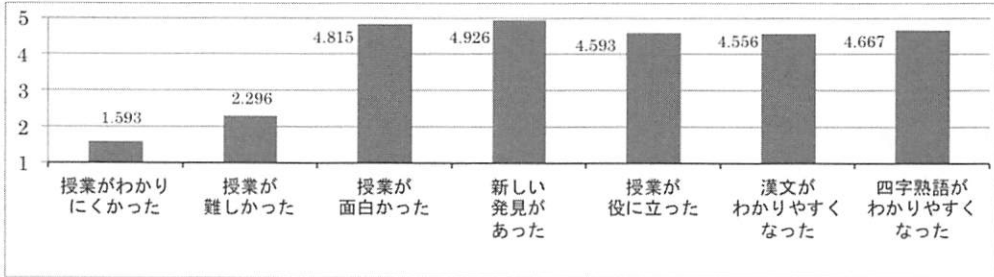
(古いことわざとその意味や読みかたを知るのが興味深かった。)

4.2.3. 四字熟語の漢文教材を使用した授業への学習者の評価

調査の枠内で実施された模擬授業の目標は、漢文に対する学習者の関心度を上げることであったため、授業に対する学習者の評価および感想も大切な評価ポイントである。そのため、提案された教材および授業に対する学習者の評価を5件法で要求する7問を事後アンケートにて設けた。ただし、教材の提案者本人による調査であったた

め、限定的なデータであることを認めざるを得ない。アンケートの項目および平均値を、参考資料として図3にて整理する。

図3 授業経の評価



事後アンケートにおいても肯定的なコメントが多く、「授業の改善点」について問う欄には記述が少なかった。しかし、下記のように教材の内容と構成の改訂に際して反映することができるコメントが二点ほどみられた。

【S10】 Сложность выполнения упражнений сразу после объяснения правила.

([漢文講読の]規則が導入される直後に練習することが難しかった。)

【S16】 Я не сразу поняла принцип 返り点. Возможно нужно было уделить этому больше внимания.

(すぐには返り点の用法が解りませんでした。説明にもっと注目をあてた方が良いのかもしれない。)

4.2. 4. 教材の内容に対する学習者の理解状況

四字熟語という題材は漢文への感心上昇のみならず、漢文に関する知識の度入にも効果的であることを検証するため、授業に対する学習者の理解度を測定するため、授業後に3問の小テストを設けた。以下でその結果を整理する。

学習者は「坐井観天」の読み・語釈・返り点付きの文・訓読文を提示し、その意味について推測する質問を設けた。解釈においては、「窮屈な状況に置かれても希望をなくさない」などの推測もみられたが、正解に近い「視野が狭い」という推測もあった。なお、多数の学習者が「井に座って、天を観る」という文字通りの意味を正確に理解でき、ロシア語で明記した。

「入郷従郷」の読み・語釈・返り点付きの文・意味解説を提示し、訓読文を書く設問を設けた。学習者による訓読文の語順は正確であった。しかし、模擬授業では、定着した訓読文「郷に入りては郷に従え」を紹介下のみで、文中の条件表現および命令形の説明には到らなかったため、学習者の回答には「郷へ入れば郷に従う」という条件表現、または「郷に入って郷に従う」という順接接続がみられた。そこからは、文法解説の必要性が窺え、今後の改題として位置づけたいところである。なお、「郷に従う」・「郷で従う」のような格助詞の間違い、また「入て」のような動詞活用の間違

が多くみられた。従って、助詞の使用ならびに動詞の活用に関する指導が必要であると考えられる。

四字熟語「以心伝心」の読み・語釈・訓読文・意味解説を提示され、返り点を付ける設問では、1名のみ正解とともに「一二点」を使用した答えを併記したため、その用法の不適切さの説明が不十分であったことが窺えた。それ以外、全員の被調査者が「以_レ心伝_レ心」と正確に_レ点を付けることに成功した。

4.3. 考察

上述の調査結果を踏まえれば、四字熟語は漢文教育の題材として有効であると言える。授業前に比して授業後は漢文に対する関心度と学習意欲が上がり、有意差も認められた。従って、漢文への関心度を高めるという目標が達成できたため、この部分においては提案した教材案が効果的であると考えられる。

授業前にも平均値が高かった四字熟語に対する関心度・学習意欲は、授業後でも高い水準であり、事前と事後の結果には有意差が現れなかった部分もある。しかし、自由コメント欄には、教材の例文すなわち四字熟語が解りやすかった・興味深かったという意見が多数あった。漢文の知識を必要としない学習者であったにもかかわらず、漢文の基礎を紹介されて、難解と感じなかったことが窺えた。従って、理解が比較的容易な四字熟語は、漢文入門の題材として使用する価値があると言えよう。他の題材と並んで、四字熟語を活用することによって、入門期における学習者への負担軽減の効果が期待できるであろう。

一方、本調査の対象者は史学専攻の学生ではなかったため、史料への関心度が比較的低く、授業後でもほとんど上昇しなかった。今回取り上げた史料は『吾妻鏡』の例のみであり、史料に対する関心度を高めるには不十分であったと考えられる。四字熟語は史料を読むのに必要な漢文講読力を培う目的では使用できるが、入門期から他の題材の取り入れも必要である。従って、史学専門家に対する漢文教育については別当で更なる研究が必要であると考えられる。

なお、四字熟語は漢文教育の題材として価値があることを裏付ける結果を得られたとともに、いくつかの問題点も明確になった。一つは、今回の調査における訓点は、返り点のみを使用した。しかし、小テストでは助詞および動詞の活用の間違いが多数みられたため、今後は第一段階を取り入れ、返り点のみならずヲコト点も付加することが望ましい。また、訓読文においては現代仮名遣いを使用した。しかし、漢文の勉強を続ける学習者にとっては、歴史的仮名遣いの知識が必要となってくる。そこで、漢文の学習を続ける学習者向けに、教材の第三段階を加え、訓点は返り点のみにし、訓読文を歴史的仮名遣いに改めることが望ましい。即ち、漢文入門の教材を以下の3段階に分けて編成する。

- (1) 現代仮名遣いを使用し、返り点とヲコト点を両方付加する。

例) 訓点：断_レ章取_レ義、訓読：章_ヲ断_チ義_ヲ取る

- (2) 現代仮名遣いを使用し、返り点のみを付加する。

例) 訓点：断_レ章取_レ義、訓読：章^{しょう}を断^たち義^ぎを取る

- (3) 歴史的仮名遣いを使用し、返り点のみを付加する。

例) 訓点：断_レ章取_レ義、訓読：章^{しょう}を断^たち義^ぎを取る

上記のようなレベル分けにより、調査結果で明確になった問題点の克服が可能であると考えられる。

5. おわりに

本稿では、四字熟語という比較的身近な題材を使用した教材を作成し、その実用性を検証するためにロシア人日本語学習者に対して実施された調査結果について論じた。

典型的な漢文として『論語』、和化漢文として『吾妻鏡』が一例ずつ掲載した教材では、漢文と返り点についての概略を紹介し、その使い方の説明と用例として15点の四字熟語を掲載した。最後に返り点の付加や訓読文の作成練習できる3点の練習問題を設定した。調査結果では、改善点および例文と問題文を増やす必要性が窺えたが、教材の概念および構造は、使用する意義のあることを強調したい。

ロシア国内日本語学習者28名に漢文と訓点・訓読の基礎知識を紹介し、授業の前後に実施したアンケートと授業後に実施した小テストの結果を分析し、漢文に対する意識の変化について考察した。この結果、漢文に対する学習意欲が僅かではあるが高まることを検証できた。また、小テストでは、動詞の活用と助詞の混乱という問題点はみられたが、返り点(レ点)が正確に使われたため、返り点(レ点)の用法に関しては教材が実用性であることも検証できた。従って、四字熟語は、他の漢文教材への入門段階において活用可能な題材であり、学習者への負担軽減の効果が期待できるものと考えられる。

参考文献

- 荒木龍太郎(2009)「漢文教育テキスト素材選定の思案」『活水論文集. 現代日本文化学科編』52、pp.13-33、活水女子大学
- 石井正彦(2001)「『文章における臨時一語化』の諸形式—新聞の四字漢語の場合—」『現代日本語研究』8、pp.1-34
- 磯野美佳(2004)「展示を意識した『書写』の教材開発・授業の展開—意欲と集中力を高め、学習効果を高める—」『中等教育研究紀要』pp.85-92
- 太田亨(2006)「漢文教材を援用したプレゼンテーション—四字熟語を利用した場合—」『広島商船高等専門学校紀要』第28号 pp. 86-75
- 奥村郁子(1994)「『漢文』の教材編成をめぐる」『高校教育研究』46号 pp. 15-33、金沢大学
- グリブ ディーナ(2013)「ロシアにおける日本漢文の研究史および日本漢文の教育現状

- と学習者の意識に関する事例研究』『日本語研究』33号
- 古田島陽介(1998)「『漢文訓読=記憶術』論再検証」『明星大学研究紀要. 日本文学文化学部・言語文化学科』6 pp.85-95
- 後藤昭雄(2005)「日本における日本漢文学研究の現状と課題」『世界における日本漢文学研究の現状と課題：2005年国際シンポジウム報告』
- 駒井明・ローリック T.H.(1988)『An Introduction to Japanese Kanbun』名古屋大学出版会
- Crawcour、 Sydney(1965) *An Introduction to Kanbun*. Michigan Center for Japanese Studies.
- 佐藤武義(1996)「四字熟語」『漢字百科事典』明治書院
- 真藤建志郎(1987)『金言至言「四字熟語」』講談社
- 築島裕(1980)「漢文」『国語学大辞典』東京道出版
- 野村雅昭(1975)「四字漢語の構造」『電子計算機による国語研究 VII』pp.36-80 国立国語研究所
- 日比野浩信(2008)「大学生の日本語能力の現状・各論（ことわざ・慣用句・四字熟語・部首）－豊橋技術科学大学生の場合－」『雲雀野』30号、pp.121-135
- Маевский Е.В.(1991) *Учебное пособие по старописьменному японскому языку (бунго)*, Изд-во МГУ (マエフスキー E.V.(1991)『日本の昔の書き言葉(文語)の教科書』モスクワ大学出版)
- 町泉壽郎(2009)「海外の日本研究者における日本漢文に需要と対応」『東方学』第118号 pp.140-150 東方学会
- 山本徳子(2007)「生き生きとした国語教室の創造－マンガを用いた漢文学習・『史記』項羽本紀の授業実践－」『山口国文』30、 pp.119-122

付記

本稿は、2014年度日本語教育学会秋季大会（富山国際会議場）において口頭発表いたしました内容に加筆したものであります。口頭発表の席上でご指導・ご助言をいただきました方々に御礼を申し上げます。また、本稿の執筆にあたり御指導くださいました浅川哲也先生に心より感謝申し上げます。

さらに、調査にご協力下さいました方々に厚く御礼を申し上げます。

(GRIB Dina・首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程)